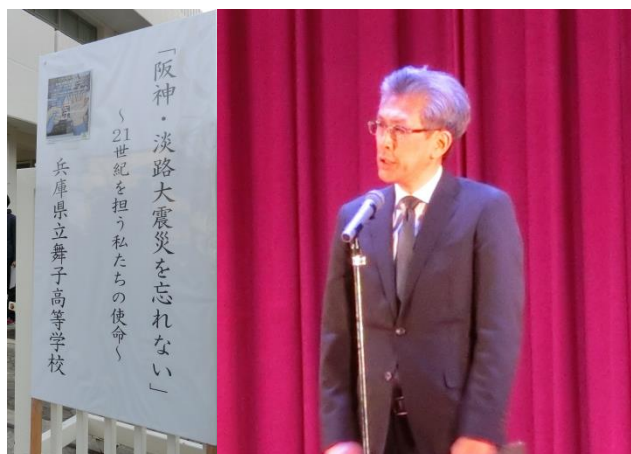


舞子高等学校 令和7年度 震災メモリアル行事
「阪神・淡路大震災を忘れない」～21世紀を担う私たちの使命～
令和8年1月15日（木）



本日は、「1.17 震災メモリアル行事『阪神・淡路大震災を忘れない～二十一世紀を担う私たちの使命～』兼ひょうごユース防災・減災ワークショップ」を関係する多くの皆様のご尽力により開催できますこと、心より感謝申し上げます。また、ご多忙にも関わらず、ご出席いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

平成7年1月17日、午前5時46分、突然の激しい揺れが人々の生活を一変させました。6,000人を超える尊い命が失われ、家族を失い、住まいを失い、深い悲しみと不安の中で多くの人々が過ごした日々があったことを私たちは決して忘れてはいけません。

そして震災は、私たちに、命の尊さ、人と人との絆、そして「助け合う心」の大切さという多くの教訓を残しました。震災のあの日、人々が互いに支え合い、声を掛け合い、命を守るために必死になった姿があったことも忘れてはいけません。災害は、いつ、どこで起こるかわからない。だからこそ、私たちはその教訓を次の世代にしっかりと伝えていく責任があります。

毎年1月17日、阪神・淡路大震災の犠牲者を悼み、神戸の東遊園地で開かれる「1.17 のつどい」。灯籠でかたどる文字が、今年は『つむぐ』に決まりました。実行委員会がその言葉を選んだ理由は、「日本中にいる地震で困っている人たちの気持ちを、未来につむいでいきたい」という応募者の思いだそうです。そして「つむぐ」という言葉には、追悼の思いを胸に刻みながら、これから先に震災の記憶と教訓をつないでいくことや、今を生きる私たちが震災のことを共有しながら、未来に手渡していくという意味が込められています。

細い繊維を組み合わせる糸を作り出すことから、人と人とのつながりを大事にして積み重ねるという意味に例えられる「つむぐ」という言葉。阪神・淡路大震災では、多くの人たちがそれぞれの思いを積み重ね、互いに支え合い、助け合ってこられました。そして震災から31年経った今も日本中で地震による被害で困っている人達がたくさんいます。その人達の気持ちを未来につむいでいくために、高校生や中学生のみなさんが避難訓練や防災学習等を通じて、自分の命を守り、仲間と助け合える力を備え、受け取った教訓のバトンをさらに後世まで伝え続けてくれることを願っています。

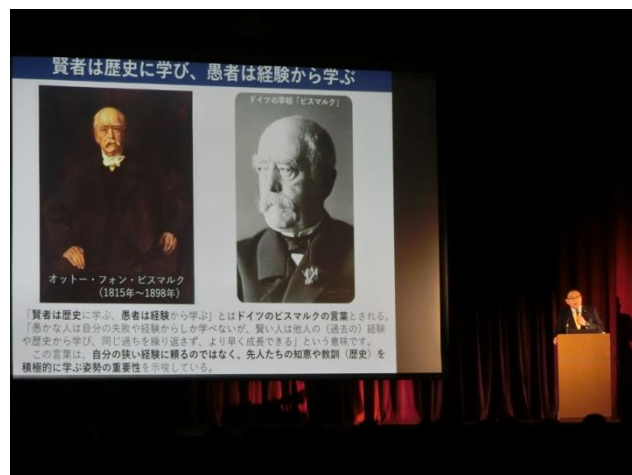
最後に、本日の震災メモリアル行事が、参加されたみなさんにとって、有意義な時間となることを祈念して開会の挨拶とします。

第1部 追悼公演（石田 裕之 様）





第2部 全体講演 (清元 秀泰様)



第3部 各分科会



第4部 避難所生活体験/
舞子千人鍋(炊き出し)

